

# 二つの異なる世界の境界線上で観察し熟考し決断するために 教養教育の一環としての多読授業

深谷素子

## 1. 教養教育とは何か

2023年に発表された村上春樹の『街とその不確かな壁』と宮崎駿の『君たちはどう生きるか』はともに、矛盾と不条理に満ち、合理的・効率的には「片付かないこと」でできた現実世界を前に、アジールに逃げ込むか否かで葛藤する主人公を描いている。彼らは、二つの世界を観察し熟考し最終的決断を下す。本稿では、このような知的態度を養うための燃料を学生の頭と身体に注ぎ込むことが教養教育であるとの前提に立ち、それはいかにして実践し得るのかについて考えたい。なお本稿では、教養教育とリベラルアーツ教育を同義として扱う。

『21世紀のリベラルアーツ』(2020)において、石井はリベラルアーツを「人間を種々の制約から解放して自由にするための知識や技能」と定義する(p. 24)。隠岐は、奴隷制を擁した古代とは異なり、現代のリベラルアーツは「性別や人種、障害の有無を問わず、精神的な次元と経済的な次元の双方で「自由」を得て、自分の人生を切り拓きたいと思っている人々のためのアーツ(技芸)」だと述べる(p. 138)。さらに、國分は、「リベラルアーツ教育とは、人々が問いを発する存在へと自らを確立するための手助けをする営みだ」とする(p. 131)。一方、内田(2012)は、大学のカリキュラム全体で多様な選択肢を用意し、「数打ちあたる」方式で学生の学びを起動させる仕掛けが教養教育だと言う。以上の定義を踏まえ、本稿は、これら4つの要件を満たすようデザイン可能な英語多読プログラムは、教養教育に極めて適していると主張する。

## 2. 英語多読プログラムの特徴

近年、英語多読を速読の訓練と混同するような言説が散見されるが(今井, 2020)、多読の目的は「たくさん読むこと」であり、短時間にたくさん読むために速く読む必要はない。Day & Bamford(1998)の多読10原則には、「Reading speed is usually faster rather than slower as students read books and other material they find easily understandable」とあり(p. 8)、速く読む訓練が多読ではないのである。多読プログラムにおいては、ゆっくり読んでも、速く読んでも構わない(Reading speedの自由)。浅く読んでも深く読んでも構わないし、本によって読み方を変えてもよいし、同じ本を再読しても構わない(Reading styleの自由)。共通目標は「大量の英語を読むこと」だが、読書量は成績には関係ない(Reading amountの自由)。教室には、多様な難易度・ジャンルの英語書籍が大量に用意されており、学習者は読みたい本を選んで読んでよい。つまり、選書の自由が確保されている。英語が理解できる本を読むよう推奨されるが、読むたびに理解度テストやレポート提出が課されるわけではない。つまり、教師による読書の査定からの解放である。「何をどのくらいどう読むかは、学習者ひとりひとりが自分で決める」、これが多読プログラムの要諦であると言えよう。もちろん、読書量のノルマや読後クイズを課す多読プログラムもあるが、強調したいのは、多読プログラムは、自律的読書、自律学習を促すようデザインすることが可能だという点である。

## 3. 自律的読書を促す英語多読プログラムが学習者にもたらした変化

「何をどのくらいどう読むかは自分で決める」多読プログラムが、学習者にどのような変化をもたらしたのか、3種類のデータを示したい。まず、2023年度に神奈川県内私立大学法学部2年生を対象とした多読授業の調査結果である。英語多読に特化した90分授業を年間28回実施した。ここでは、黙読だけではなく、speed reading, pleasure reading, critical reading, close reading, repeated reading, timed reading, shared reading, deep readingなど多様な読み方を体験できるようアクティビティを導入した。事前事後にリカートスケール5段階評価のアンケートを行い、15の設問について値の変化をt検定(両側)で分析した(表1)。注目は、選書に関する設問8、11と読書の楽しさに関わる設問7が有意な肯定的変化を示している点だ。多読授業を通して、自分の英語力や好みにあった選書ができるようになったこと、英語読書を楽しめたことが推測できる。2022年度も同様の調査を行い、同様の結果を得ている(深谷, 2024)。多読プログラムの特徴である「読む本を学習者が自由に選ぶこと=選書」に関する設問において、有意な肯定的変化が見られたことは重要だ。

表1: 2023年度実施 多読授業前後の学習者の意識変化

	設問 (N=41)	事前M(SD)	事後M(SD)	差	t
1	英語が好きだ	3.29 (1.12)	3.66 (0.91)	0.37	-2.419
2	英語をスラスラ読むことができる	2.29 (1.03)	2.95 (0.95)	0.66	-5.534*
3	英語を読むのは楽しい	3.15 (0.91)	3.73 (0.78)	0.59	-3.954
4	英語を読むとき、日本語に訳さずに読むことができる	2.59 (1.26)	3.22 (0.91)	0.63	-3.986*
5	英語を読むのが苦手だ	3.27 (1.25)	3.02 (1.08)	-0.24	1.881
6	英語の本を読みたい	4.12 (0.64)	4.02 (0.61)	-0.10	0.813
7	英語の本を読んで面白いと思ったことがある	3.24 (1.09)	4.56 (0.55)	1.32	-7.478*
8	自分の英語力にあった英語の本を選ぶことができる	2.83 (1.05)	3.73 (0.78)	0.90	-4.991*
9	英語で本を読む習慣がある	1.46 (0.84)	3.07 (0.96)	1.61	-9.242*
10	忘れられない英語の本がある	1.66 (1.02)	3.73 (1.03)	2.07	-10.951*
11	自分の好みにあった英語の本を選ぶことができる	2.95 (0.95)	4.24 (0.66)	1.29	-7.849*
12	英語の本を読んで深く考えたことがある	2.05 (1.22)	3.71 (1.01)	1.66	-8.728*
13	英語を見ると憂うつになる	2.32 (1.08)	2.29 (1.10)	-0.02	0.154
14	内容が面白ければ英語の本でも読むのが苦にならない	3.73 (0.98)	4.05 (0.77)	0.32	-2.174
15	英語の本を読んでいて理解できているかどうか分かる	3.20 (1.01)	4.00 (0.74)	0.80	-5.257*

注: df=40, \*p<.0034. 設問5, 13は否定的な設問内容になっている。

次に、2023年度の多読授業後、「来年度多読授業を受ける後輩にどんなアドバイスをするか」という質問に記述式回答をさせた調査結果を示す。回答内容をコーディングしたところ、4つのテーマが抽出された。1つの回答に複数のテーマが含まれるため延べ数だが、「選書」27件(51.0%)、「時間配分」10件(18.9%)、「読書習慣」9件(17.0%)、「読書方法」7件(13.2%)という結果だった。受講者の半数以上が、選書に関するアドバイスをしており、彼らが、多読授業で最も重要なことは選書であると考えていたと推測される。回答例を見てみると、「選書が今後の読書に対する熱量に大きく影響することを実感した」「大事なのは自らが本当に興味のある本を読むこと、そして自らのレベルに合わせた本選びが大事だと思う」「読むことへの慣れを感じたらジャンルを変えたり文字数の多い物にチャレンジしたりすると勉強になる」「興味を持った本を読むことで理解しようと集中して読書ができ、力がつく」など、適切な選書が読書を通しての学びにつながるという自らの経験を伝えようとしていることがわかる。同時に、受講者たちが試行錯誤しながら読める本、読みたい本を選んでいくことも推測される。

最後に、4年間という長期にわたる多読プログラムの調査結果を紹介する。上記とは異なる神奈川県内私立大学文学部での事例である。調査参加者2名は、入学前準備学習から多読を開始し、1,2年次には必修科目で30分の授業内多読を実践、3年次以降は課外活動として多読を継続し100万語を達成した。この2名に対し90分ほどの半構造化インタビューを行い、4年間の多読プログラムでの経験を語ってもらった。ここでは特に、選書に関連する発言をインタビューから抜粋する。まず、Aさんは、「多読をつまらないともうやめたいと思ったことはないか」との問いに対して、「なかった」、なぜなら「自分の好きな本が読めるからだ。課題としてこれ読めと言われるとやる気が起きないが、自分で選んで好きな本を読めると楽しい」と答えている。Aさんは卒業までに1,000冊読んでおり、多読プログラムにおける自由な選書が読書へのモチベーションを継続させたと考えられる。次に、Bさんは、多読授業が他の英語授業とどこが違うかとの問いに対し、「受験や模試から解放されて自分が読みたい本を読めるようになったのがよかった」と答えている。高校時代は「なにも考えずに学校から配られたものを解いて答え合わせの繰り返しだった」が、多読では「自分で考えて、今、私(の英語力)はこれくらいだからこの本を読もうなどと考えなきゃいけない、それがありがたかった」と言っている。Bさんの語りからは、自分で考えて本を選ぶことが一種の解放であり、これが自律的読書につながったことが読み取れる。さらに、多読授業内の個別指導に関する質問に対し、Bさんは注目すべき発言をしている。多読プログラムでは、受講者の読書中、教員は机間巡視しながら読書の様子を観察し、適宜アドバイスをしていくのだが、それについてBさんは、「早いペースで教員が回っていくのがよかった」、なぜなら「ああ、もう本当に正解ないんだと思ったから」だと答えている。「一回もそれじゃなくてこれを読みなさい」と強制されなかったのが楽しかったという。「教員の思惑に誘導しようという意図が見えなかったのがよかったのか」と調査者が確認すると、「そうだ」と答えている。ここからわかるのは、教師の想定以上に、学習者は、教師の期待や隠された正解に敏感であり、無言のプレッシャーが読書を阻害する可能性があることだ。多読プログラムでは、このような場合に、遠くから見守りつつ、ぎりぎりまで学習者に任せておくことが可能である。この事例では、教員が余計な誘導をせず、Bさんに任せたことで、Bさんは自分で考えて選書をし、結果、読書の楽しさを継続できたと推測できる。

#### 4. まとめ

以上、教養教育/リベラルアーツ教育の一環としての多読プログラムの可能性を探究した。データが示す通り、多読プログラムの参加者たちは、自由に本を選ぶ環境で、解放され、精神的次元での自由を獲得し、「どんな本なら読めるのか、どんな本を読みたいのか」という答えのない問いと格闘し、「数打ちゃ当たる」方式で用意された大量の書籍の中から自分の学びを起動させる本を探し出し、読書を楽しんでいたことが読み取れる。多読プログラムにおける「何をどのくらいどう読むかを自分で決める自律的読書」は、教養教育/リベラルアーツ教育として有効だと言えるのではないかと推測される。多読を通して学習者が獲得した「自分で考えて本を選ぶ力」がやがて、二つの異なる世界の境界線上で、観察し熟考し決断し得る力となって、彼らを成熟させることを期待したい。

#### 付記

本稿におけるデータ使用については、倫理審査を経たのちに調査参加者の同意を得ている。

#### 参考文献

- Day, R. & Bamford, J. (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge University Press.
- 深谷素子 (2024). 「彼らはどのように本を読んでいるのか：多読授業受講者のナラティブ探究」, *JAILA Journal* 10, 81-95. doi: [https://doi.org/10.57359/jailajournal.10.0\\_81](https://doi.org/10.57359/jailajournal.10.0_81)
- 今井むつみ (2020). 『英語独習法』 岩波書店.
- 石井洋二郎 (編) (2020). 『21世紀のリベラルアーツ』 水声社.
- 内田樹 (2012, April 6). 「大学における教育--教養とキャリア」 [Web log post]. Retrieved from [http://blog.tatsuru.com/2012/04/06\\_1508.html](http://blog.tatsuru.com/2012/04/06_1508.html)